

---

# Boys Voice

琴瀬 裕依

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Boys Voice

### 【Nコード】

N7538Q

### 【作者名】

琴瀬 裕依

### 【あらすじ】

兄・千秋の仕事上の都合で【桜南陸町】おうなんりくへ引っ越してきた、主人公・風葉千澄は4月からこの【私立桜南陸高校】の転入届や書類等を出すため職員室へ向かう途中、美しい歌声に惹かれて部室へ向かう。ゆつくりドアを開けるとそこには歌っていた男子がいて、出会っていきなりファーストキスを奪い…！？

## 第1話 1-3 『ファーストキス、奪われました』

私立桜南陸高等学校。

有名なその私立高校は受賞されたトロフィーや賞状は数知れず。毎年高校受験者が後を経たずに受けにくる人気のある高校。

一番目立っている部活動はただ一つ。

男子5人組ユニット『Boys Voice』。

その美しい歌声は老若男女にメロメロだ。

そんな有名高校へ転校してきた少女の高校生活が今ここに始まる。

桜南陸町へ引越してきた風葉一家。

その荷物整理に追われていた。

「千秋兄、一眼レフとか入ってる箱ココに置いてくね」

「ああ、うん。ただ壊すなよー」

「千春姉、昨日切れたドレスリングを千秋兄に与えていい？」

「うん、いいわよ〜」

「待て、千春。賞味期限切れたドレスリングなんか食わねえよ」

「千春姉〜っ、コレ千秋の中学校時代の卒業アルバム出てきたんだ

けどー」

「千夏&千冬。それはご近所さんに持ってて渡してね」

「はいっ!」

「『はい』じゃねえよ!つか、なんで近所に卒業アルバム持って行って渡すバカがどこにいる!」

「千春姉。千尋と千鶴と千影見なかった？」

「あの3人ならお使いに行っただわよ。大丈夫、千影が付き添いで行ったから」

「なら、いいわ」

「千澄、そのネジの入ってるケース取って来て」

「え〜、ハイ」

「おいコラ！！【自主強制】踏むな！痛いっ！！」

「あら、ごめんなさい。気がつかなかったわ」

「だ、だから【自主強制】踏むなって！！」

ただ単に騒いでは一向に片付けが進まない。

全然終わってない場所はキッチンとリビングのみ。

「千秋兄、そろそろ高校見学しに行つていい？」

「私が許可するわ。いつてらっしや〜い」

「なんで千春オクエが許可すんだよ…」

「またそんなこと言つて…千秋の交際中の彼女にこんなことやあんなこと言つていいかしら？」

「あんなことやこんなことつて、千春まさかつ！！？」

「ウフフ、それはちびっ子の前では言えないわよ」

「ね、ねえ…そろそろ行つていい？」

「あ、ごめんね。もう行つていいわよ」

「じゃ、いつてきま〜す」

まるで慌てたように玄関から出た千澄は、桜南陸高校へ向かった。

家から徒歩で5分ほど近かった。

たとえ遅刻や寝坊しても間に合う距離だ。

4月からこの高校へ転校するため、色々書類を届けないといけない。ある意味面倒なことだがしかたがない。

高校の校門を通り過ぎた後、どこからかギターを弾く音色が響いている。

そして歌声が響いている。

「わ〜っ、なんて歌声なの？男子が歌う声つて」

甘い誘惑に包まれた歌声につられる千澄はそのまま部室へ向かった。部室のドアは鍵が掛かっていなかったの、そ〜っと開けてみると…

「あっ！」

思わず声を上げてしまった。

さっき歌っていた男子が振り向き、彼女に気がついた。

千澄に近づくと男はジロジロと見つめた。

「見たことがねえ顔だな…。オレは茅野悠胡だ。お前は？」

「ふ、風葉千澄よっ」

「ふーん、いい名前じゃん。気に入った！」

「あ、ちよっ…」

いきなり出会ってはキスをしてきた。

(あっ、や…。ち、力が入らない…)

当然男の力だ。ぎゅっと人形のように抱きしめてるため、華奢な彼

女の力じゃ解放してくれない。

だんだん千澄の頭が回らなくなってきた。

キスするのをやめると悠胡は千澄を見つめる。

目には涙を浮かべていて、ほんのり赤く頬を染め、「やだ、やめな

いで」とまだ唇を求めていた。

もう一度してあげたいが可哀想だと思い、離してあげた。

第1話 2・3 『ファーストキス、奪われました』

だがもう一度抱きしめてはキスをする。

(ああ、もう…ダメ…)

もう限界。千澄は力尽き、気を失った。

ぐったりと悠胡ゆうこの腕の中で。

「あ、やべー！やりすぎたっ！ー！」

責任感じた悠胡は自ら腰に上着をそっとかけた。

(これ、他の奴らに見つかったらやべえしな…)

あせる悠胡。すると千澄のカバンの中から書類がばら撒かれてあった。

それを拾って中へしまっただけと見えた。

ある何行かの文字だけをじっと見た。

『仕事上の都合』

『けんりつおんほくりん県立桜北凜高等学校』

『今年度4月より、2年2組から転入』

『住所、桜南陸町5丁目』

(こいつ、オレと同じクラスになんの?)

さらに個人情報までもを見る。

何度も同じところをめくる。

(へえ〜女子バスに入ってたんだ。しかも好成绩で)

「ん？何してるの？」

「わあっ！ー！」

気がついたようだ。

目を擦りながらゆっくりと起きる。

2

第1話 2・3 『ファーストキス、奪われました』（後書き）

時間がなかったため、途中でとぎれてます。

ごめんなさい><。

明日から改します（汗）



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7538q/>

---

Boys Voice

2011年10月7日02時15分発行